

# 秋田の風

日銀秋田支店長コラム

先日、妻と秋田内陸線に乗車した。田んぼアートの頃に続いて今回で2回目だ。夏の水田や山々の緑も良かったが、曇った車窓から眺める深いモノトーンの雪景色はまた格別だった。一つの蔵の種類の酒を、同乗した蔵人から紹介を受けながらゆつくりと味わう「酒蔵列車」というイベントに参加したのだが、その趣向も面白かった。

秋田内陸縦貫鉄道（北秋田市）が運行する内陸線は、沿線人口が急速に減少する中、線路の維持などにかかるコストが重くのしかかり、県や周辺自治体などの支援に加え、補助金も活用しながらやりくりしているのが現状だ。そうした経営環境の第三セクターにあつて、前向きに次々と新しい手を繰り出しているのが魅力でもある。

昨年は、古い車両部品などを入れたカプセルトイ（ガチャガチャ）を駅に置き、鉄道ファンから好評とのことだ。沿線住民、

## 冬の内陸線に思う

観光客以外の第3の客層を開拓できないかと、車内での運動による健康維持効果を試す取り組みも行っている。社長いわく、「バットは振り続けるもの」だそう。

ここ数年で、日本経済は動き出した。物価も賃金もほとんど変わらない、いわゆる「失われた30年」と言われた時代ではなくなってきた。当然、求められる企業経営も、失われた時代とは異なるものになるだろう。人件費をはじめ各種コストが今後

## 挑戦する企業応援を

も上がっていくことを前提に、収益を継続的に高める方法を考えていく必要がある。「守り」に徹する経営は、期間や範囲を限定したものならともかく、これまでよりリスクを伴うことになりそうだ。



最近、県内企業を訪ねていると、「攻め」の経営に向けて行動に移す経営者にお会いすることが増えてきた。設備投資により商品・サービスの付加価値を高めながら価格転嫁も進める、県外の企業の合併・買収（M&A）により販路を広げる、ビジネスの範囲を川上や川下に拡大するなどさまざま。

一方で、残念ながら後継者不足などから事業をたたむ企業も見られる。ただ、現在は日本全体が深刻な人手不足。従業員の雇用は確保されやすい」といった話をよく耳にするのが救いか。

この冬、何度かスキーにも出かけている。たざわ湖スキー場では、海外のスキーヤー、スノーボーダーを目にすることが増えたと感じる。すでに人気のニセコや安比、白馬とはまた違う、たざわ湖の魅力に気付き始めたのだろうか。県内需要が細る中、東北を代表するスキー場の一つとして県外・海外の方も十分に満足し、リピーターになっても

らえるよう、適切な価格転嫁を進めつつ付加価値の高いサービスの提供が今後も模索されることを期待したい。

森吉山阿仁スキー場では、まるで胸を張るかのように立派に育った樹氷に圧倒された。歓声を上げる外国人観光客の姿に、筆者までもが誇らしい気持ちになった。観光バスだけでなく、内陸線に乗って訪れる外国人の姿も目にした。

企業を取り巻く環境が大きく変化する中、バットを振り続け

る、あるいはまさに振り始めようとする企業は他にもたくさんある。秋田では、冬に家にこもっているとなもみができると言われる。県民の皆さまも、「若い頃に一度行ったから…」ではなく、挑戦する企業の取り組みを応援しに再び足を運んでみてはいかがだろうか。新たな発見や出会いがあるかもしれない。

（片桐大地・日本銀行秋田支店長）

〈随時掲載〉